宮崎汎会員が見た世界の旅・第２部人物編第２話

独裁者チヤウシェスクの末路　　ルーマニア

ルーマニアの宗教は東方正教会である。祈りの場は国土の至る所に散見されるが、１５世紀ルーマニアではトルコ戦に勝利するたびに教会を建築していったそうだ。寒村の道すがらわずか３００ｍと離れてないところに小さな教会が並んでいたりもする。東方正教会は私たちが普段見慣れているカソリックやプロテスタントの教会とは異なる。
内部はカラフルなイコンやイコノスタスにびっしり覆い尽されている。ルーマニアの山間部モルドヴァ地方にある世界遺産の５つの修道院は、外壁まで隙間もなく最後の審判などをモチーフにした色彩豊かなフレスコ画に彩られ、見る者を恍惚へといざなう。それは難解なキリル文字の判らぬ農民に絵で判り易くという意図で描かれものである。ちなみにキリル文字はロシアに非ず、お隣ブルガリアでつくられた。

モルドヴァ地方にある世界遺産の修道院、外壁はびっしりフレスコ画に覆われている

今も敬虔な信者が多いが、社会主義時代の悪しき影響で若年層が教会へ行かなくなったと年配者は嘆く。バスがスピードを落としたので前方を見ると道幅一杯に馬車がのんびり走っている。馬車はいまだ現役でどこでも見かける。こうしたゆったりした生活のリズムは、私たちがとうに置き忘れてしまった昔を思い起こさせ心を和ませる。因みにルーマニアにはまだ高速道路はない。
ルーマニアの物価は最近急速に値上がりしたとガイドは嘆くが、日本から見ると非常に安く感じられる。スーパーで寿司と称する寿司らしき折詰を買った。日本円換算で８００円と非常に高額である。横に並んでいるライ麦パンは直径３０ｃｍもあってずっしりと重いが、値段はわずか６０円である。特殊なものや輸入品は高額だが、生活必需品は安価である。ネクタイを着けた背広姿を見かけることは稀で大きな都市以外ではまったく見かけなかった。
さて、ちょっと物騒な話題をひとつ。ルーマニア全土は深刻な野犬問題に頭を抱えている。推定２００万匹が野放しで年間２万人が犬に襲われている。ガイドから犬には近寄るなと何度か注意があった。当局の駆除は動物保護団体の激しい反対で野犬対策は遅々として進まないそうだ。
ドナウデルタはヨーロッパ８カ国を流れ下ってきたドナウ河が黒海に注ぐ河口の広大な湿地帯である。ルーマニアのトゥルチャの町を基地に、デルタの景観を楽しむクルーズがある。船が岸壁を

離れ２０分ほどすると後は人間の手の加わった人工物を終日目にすることがなかった。退屈と言う人もいるが日本では味わうことのできない静寂の世界である。移り変わる風景も千変万化で飽きることはない。さて旅の楽しみの一つは食事であるが、正直言ってパンや乳製品を除いてうまいものには今回は巡り逢えなかった、いささか心残りではある。
終着地の首都ブカレストに到着した。その夜旅行社から緊急連絡が入りアイスランドで火山が噴火し、欧州各地の空港は危険回避のため軒並み封鎖され、そのため帰国が何日になるか予測不能であると告げられた。ようやく関係者の努力によってウィーンから東京便の予約が取れたが、依然ブカレストの空港封鎖が続き先の見通しが立たずウィーンまで行けない。とどのつまりバスをチャーターしてブタペストを経由して１泊２日、千キロを越える強行軍でウィーンに滑り込んだ。結局６日間の延泊で無事帰国できた。数多い渡航経験の中で始めて遭遇した出来事であり非常に多くの事柄を体験できた。

紅い水を噴き上げる噴水

この間、心配しつつも有り余る時間でブカレスト市内やその近郷を、地下鉄やトラムあるいは徒歩でくまなく見て歩いた
ブカレストでは奇妙なものに出くわした。それは市内のそこここにある噴水の水が、すべて真っ赤に染められているのである。帰国後得た情報で血友病を啓発するイベントのためと判明したが、現地ではなぜなのか理由は誰に尋ねても判らなかった。革命を引き起こした熱き血潮と言うより吸血鬼ドラキュラをつい連想してしまったものである。
ところで日本を出る前には、まったく気にも留めなかった１９８９年１２月に起こった「ルーマニア革命」の歴史探訪を図らずもなぞることとなり、期せずして今般の旅の中で最も深く心に残る事柄となった。

首都ブカレストの豪壮な「国民の館」

ブカレストは時の独裁者チャウシェスクによって歴史的な街並みや建造物は一掃されて見るべきものは無いが、独裁者はその妻エレナと共にばかばかしいほど巨大で豪華で国民は誰一人見学することも適わなかった「国民の館」なるものを作った。世界で一番大きな建物はアメリカのペンタゴンだが、国民の館は世界で二番目に巨大だそうだ。館内を見学して権力者の愚行というものを実感できた。

また誘われて大方の市民もその所在を知らなかった郊外にあるチャウシェスクの墓を訪れた。広大な軍の施設の裏手に青山墓地よりかなり広い墓地があり、目指す墓はその一角にあった。

独裁者の墓は畳１畳ほどの広さで、膝丈ほどの簡単な鉄柵で囲ってあるだけである。道一つを隔ててその妻エレナの墓もあった。両方ともまわりの大きく立派な墓に比しなんとも見栄えのしない、そのみすぼらしさにショックを受けた。エレナの墓のすぐ脇には簡易のトイレさえ設置されている有様だ。

貧弱な独裁者チヤウシェスクの墓

チヤウシェスクが演説をしようとしたバルコニー

革命前夜、チャウシェスクが共産党本部のバルコニーから演説しようとしたとき、広場を埋めた大群集から潮のようなどよめきが起こり、静めようと手のひらを振る独裁者の姿は、テレビで全世界に放映され、当時固唾を呑んで見守ったあの時の共産党本部のバルコニーの真下に行ってみた。

群集が詰めかけた広場は画面で見たよりずっと狭いが、ここに５万人もの怒れる人々が立すいの余地もなく集い、国を変えたのだと思うと感慨もひとしおであった。その後独裁者は首都ブカレストを脱出したが間もなく捕らえられ夫婦とも銃殺された。　（２０１０年４月）